

釣れ釣れなるままに

2001年思い出の釣行記 PART. 2

Challenge the revenge

鹿島釣狂

釣遊会第3回大会

☆開催日 平成13年6月17日
☆開催場所 歌別川～エリモ漁港
☆入釣場所 沖ノ島
☆潮 満潮 23:24 116cm
干潮 6:25 56cm
☆釣果 カジカ 345 mm 5
アブラコ 460 mm 2
重量 4540 g

| | | | | |
|----|---|-----|---------|---|
| ☆成 | 績 | 合計 | 1 2 5 9 | 点 |
| | | 成績 | 1 | 位 |
| | | 持ち点 | 1 | 点 |
| | | 累計点 | 7 2 | 点 |



増毛港

釣遊会第2回大会は、職場の野外行事と重なり参加することができなかった。天気予報が目まぐるしく変わり、行事の実施が危ぶまれたが、当日は晴天に恵まれ無事終了することができた。この天気なら釣遊会の仲間も皆よい釣りをしたことだろう。口惜しさもあり次の日の振替休日を利用して釣りに行くことにした。個人での海釣りは何年振りになるだろう。

午後2時、虫エサだけを持ち出発した。浜益の昆舎別で様子をうかがうが誰もおらず、月曜日では致し方ないところか。浜益港に行って見るが、工事のための『部外者侵入禁止』の大きな立て看板に躊躇し、結局諦めることになる。浜益川の右に海浜公園があり、その一番奥に干潟遊びができるように突堤が築かれている。その先端に一人の釣り師が見える。彼の言では「家族で釣りを兼ねて遊びに来たが、意に反して子どもの磯遊びに付き合わせられる羽目になった。」さらに「増毛港ではたくさんの釣り人がおり、釣新開にもよい情報が載っていた。」とのことである。

早速、増毛港に向かう。初めて入釣する港である。思いのほか随分大きな外防波堤がついている。そこで10人ほどが竿を出していた。最初の親子連れに声をかけたがさっぱり

である。次々と声を掛けていくが余りよい情報はない。先端から3人目の釣り人がホッケ1本と30cmと25cm程の黒ガシラ、先端の人が小さな真蝶を5匹ほどもっていた。朝からやっているがこの結果らしい。先端から2番目の人は、ホッケ1本にカジカ1本で、その隣に大きなスペースがあったので入れさせていただく。のんびりと支度をし、仕掛けを投入する。釣り大会ではこうはいかないだろう。間もなく近投の竿にぶるぶるとしたアタリがあり30cm程のホッケが上がった。

そして遠投した左の竿にカレイ独特のアタリがあり30cm程の黒ガシラが上がった。さらに右の竿が動き35cm程のホッケが釣れる。次に左の竿に25cmと27cm程の黒ガシラが続いた。私のすぐ後に来た美唄の釣り人が「釣れてますね～」と声を掛けて来た。釣れているのは私の所だけのようである。竿を少し移動して仲間に加わってもらう。

遠投した竿を手を持ってゆっくりとリーリングし、駆け上がりと思われる所で一旦止め、竿先を揺らしてやる。何度か揺らしているうちに竿を押さえ込むようなアタリがあり、糸フケを出した後に合わせをくれてやると黒ガシラが上がってくる。午後9時に納竿した時には3本のホッケと23cm～30cmの黒ガシラ13枚がクーラーに収まった。

岩見沢釣遊会の歴史を紐解く

釣遊会の長老である阿部氏が釣遊会の歴史を冊子にして贈って下さった。釣遊会の発足時から過去の資料を紐解き分かりやすく表に整理し、全3巻にして再収録したものである。その記録からは、その時々時代の移り変わりや海況の変化等が読み取れる。また、北海道の磯釣りをリードしてきた名人たちの名前もあり、その方たちは現在も北海道の釣り会の中心的メンバーとして活躍しており、新聞等での大会記録には必ずと言っていいほどに名前を連ねている。

その巻末の1ページには不肖、私の名前も平成12年度年間優勝者として掲載された。さらに、私の釣魚が過去の魚種別大物賞のカレイ部門とカンカイ部門の1位にランクされている。歴史と伝統のある釣遊会の榮譽を汚すことのないようさらに精進を重ねていくべく決意を新たにしている。

入釣場所の実釣見聞

5月25日、一日の勤務を終え、その冊子を肴に晩酌をやっていると、釣遊会仲間の島氏がビールをもってやって来た。最近の釣り情報についての歓談後、「次週の土曜日、第3回大会の下見に行くが一緒に行くか？」と私を誘ってくれる。その日は午後から会議が入っていたが、その会議を午前中に変更することにして午後は体を空ける。エサはカツオ4本のみを準備し、午後2時に待ち合わせてエリモに向けて出発した。

まずは、島氏の十八番（おはこ）である沖ノ島を状況見聞。まだ潮が高いため、島に渡ることはできず、高台の上から眺めることになる。夕暮れの磯に砕け散った波がさらさらと打ち寄せられており、その波間から垣間見える昆布の生育状況はすこぶるよいようだ。

次に歌露に向かう。歌露では湾洞を2分するように新たなテトラポットの山が沖に向かって築かれており、その左で1時間はどの実釣を試みる。しかし、二人とも釣果なし。もちろん岩盤の先に出るには潮位が高すぎる。

さらに、西に足を延ばし東歌別に向かう。舟揚場で島氏が30cm程のカジカを上げる。私にはアタリなし。

そして真夜中12時頃、再び沖ノ島の畜産農家の納屋の前に駐車し、明け方まで仮眠を取った。早朝の5時頃、ようやく潮が引けてきたので沖ノ島に上がることができるようになった。本日の最干潮時は潮位が40cmほどの予報であり慎重に渡ったが、大会当日は最干潮時が60cmとさらに高い潮位を予報しており、辺りの状況をつぶさに観察する。渡りきったすぐ正面の岩（菅原氏の岩）に上がり、私はハゴトコのみが終わったが、島氏は本アブラコの45cm程のものを抜き上げた。

その後、さらに南に下って、オノドリ岩のすばらしい海況を下見する。オノドリ岩には連盟の大会に参加している釣り人が十数名乗っていたが、左先端にいた釣り人が唯一アブラコやカジカの顔を見ることが出来たようである。

場所取り

大会当日、出発時刻に合わせて家を出る。

集合場所の向かいにある幼稚園の狭い庭では、色とりどりのビニルテープを使い2畳ほどの大きさに四角く区切られている。明日の運動会での我が子の応援のために各家庭の場所を確保しているのであろう。その中には段ボールの札で名前を明示したものがぶら下がっているのがちらほら見える。夕闇が迫る今では静寂が忍び寄り閑散としているが、明日は賑やかな歓声に包まれるのであろう。

最近の幼稚園や小学校の運動会の場所取りは、なかなか難しい問題を抱えているということである。少しでもよい場所で我が子の応援をしたいという思いは誰でも同じである。そのために、一定のルールを作らないと争いの元になるというのだ。その解決のために園や学校側で子どもに番号札を引かせ抽選で場所を確定している所が大方だという。自由に行っているところなどは何日も前から気に入った場所に杭を打ち、前日には徹夜で座席の番兵をしている地域もあるというのだから驚かされる。また、運動会の会場でパラソルを開いてとか、テントを組み立てての観戦もあるというからたまげろ。レジャー気分焼き肉をやっている家庭などは、子どもの競技そっこのけでビール等で乾杯する。

酒が回ってきて教師とのトラブルを起こしている者までいる。自分の息子が一番だったとかで、撮影したビデオテープを見せて抗議している。子どもが審判をしているのだが、その子たちにまで食ってかかる親父もいる。親父ならまだよいが、爺さん婆さん、家族で抗議している様子を聞くとうんざりさせられる。そんな親の姿を見ながらその子どもは行く末どんな人間に育っていくのだろうか。

一番いいところでいい成績をと思うのは人情か。釣りの場面でも似たようなことに出く

わすことがあるが争いだけは御免蒙りたい。

本会の◇◇氏はお孫さんの運動会の応援を懇願されていたようだが釣り大会に参加した。奥様からも娘さんからもヤンヤと言われていたはずである。苦言を呈するがお小遣い程度でごまかせるようなものではないはずだが。コホン。◆◆氏は息子さんの運動会であるにもかかわらずやはり釣り大会が大事だったようである。孫ならともかく息子までとはね〜。コホン、コホン。大会日とは言え、かわいい孫の運動会のために札幌まで出掛けた会員がいるというのに・・・ゴホン、ゴホン。と言う私も息子や娘の運動会にはほとんど行くことが出来なかったのだが・・・。ゴボゴボ、ゲッホン。そんなことをウダウダと思い巡らしているうちにバスは一路エリモに向けて突き進んでいた。

嫁さん

今大会は歌露方面に入る会員が9名を数え、どこからかよい情報が入ったのであろう。(大前、岡、西川、秦野、佐々木、前野、阿部、吉井、嵐) まだ2回とは言えトップの成績をとっている売り出し中の若い安曾氏は沈船根に入ると言う。彼にとっては初めて入釣する場所であり大変攻撃的である。

私と島氏は予定通り沖ノ島に向かうことにする。西東洋では旧道を通っていただくことになり、沖ノ島に向かうアスファルトの小道との分岐点でバスから降ろしていただく。国道からだとなかなりの距離になるので大変ありがたい。キャスターに荷物を積み込み沖ノ島に下る崖のような砂利道に出た。キャスターはアスファルトから砂利道になった所に小屋があり、その草陰に置いておく。下見のときは荷物が少なく、それほどには感じなかったのだが、今日は、あふれかえるバツカンの重さで急な勾配の坂をよろよろと崩れるように下りていくことになる。



下りたところの舟揚場前には名人会の若い会員が入っており、島氏はその右方向に入る。私は下見の時にここぞと思える潮待ち場所を見つけておいたのでその場に入る。早速、青草が生い茂る海原にドボン、ドボンとアカハラ仕掛けを投入する。海藻に揺られて静かに竿が上下する。沖の岩に遮られて波は穏やかなのである。竿先に目を凝らすはやはり穏やかな状態が続く。

時計に目をやった2時、海藻とは違うアタリがありガタガタと竿を揺らす。青草と一緒に上がってきたのは、35cm程のカジカである。島氏の話からはこの場所でカジ

カを取ることはまず無理であると聞いていたので、嫁のカジカを驚掴みにしてほくそ笑む。大事な嫁のことであり少しでも縮まらないようにとフラシに入れ海水に浸ける。

沖の島の主参上 (◎◎は菅原氏～記事にする確認はとれていない)

島氏が様子伺いにやって来た。まだ魚は取れないとのこと。そして沖ノ島の主である◎◎氏が見えられたとのことである。

私 「◎◎氏より早く渡って、◎◎氏の場所に入ったらずいかね～」

島 「それはなんぼなんでも・・・」

私 「やっぱり、そうだよね～。◎◎氏は「北海道のつり」の紙面でも皆さんに紹介している事だし、その記事を見ながら私たちが来ているのだから・・・」

「◎◎氏は私たちの事知らないんでない？」

島 「お前のことなど知らないが、俺は何度も挨拶を交わしているのでもともじゃないが・・・。それに、今さっきお前のことも言っておいたぞ～」

私 「・・・」

待っていてくれたアブラコ様

この時点で6名が沖ノ島の前で潮待ちの状態になる。3時頃外のメンバーが渡ろうと果敢に挑戦するも潮がまだ高く頓挫し、引き返してくる。私も慌てて様子を伺いに行き島氏はと見るとアブラコとカジカの婿、嫁そろえている。その時は、私は皆さんが上がってからゆっくりと場所を確保する気持ちになっていた。自分の場所に戻り再度打ち直す。4時には私以外の5名とも沖ノ島に渡っていった。再び、私にアタリがあり、先程と同じような大きさのカジカをゲットする。

4時半、先に渡った面々がそれぞれの場所を確保したようなので私も道具を片付け渡り始める。沖ノ島の左半分は途中の溝に波が打ち寄せているので渡ることはできない。入念に場所を吟味し、右方向が空いていたので、少し盤は低く波が上がってくるがそこに入釣することにする。

私が入釣場所を探している間にも◎◎氏が40cmを越えるカジカをゲットしているのが見える。島氏もアブラコを引き抜いた。この時合を逃すべきでない。あわてて竿を打ち込む。

大口を開けて待っていたのではないかと思われるほど即座にアタリがある。カジカの3本目が来た。さらに、アブラコ45cm。余程食い気が立っているのか喉の奥の方までガッポリと炊み込まれている。ペンチで針を探るがなかなか外れない。結局、ハリスを切ってしまう羽目になる。さらにカジカが立て続けに2本来た。そしてアブラコ42cm。昆布の中に投げ入れており潮の動きに合わせて竿がギコンバコンと落ち着かないが、魚と分かる明確なアタリである。

花火が鳴っても昆布取りの舟は出ない

最干潮時の6時半を過ぎてからは大きなアタリも遠のき、今度はハゴトコに悩まされることになる。周りも同じ状況なのであろう、各自移動で慌ただしくなる。潮が満ちて来たこともあり、8時には沖ノ島を離れる。さらに潮待ちの場所で再度竿を出す力が入らない。根がかりばかりを繰り返す。

提出する魚の目方を測っていると、島氏が覗き込む。

「酒があるが、そのアブラコと交換しないか？」

「酒なら俺ももっています。」

「ジュースはあるか？ 何なら、朝飯もあるぞ。」

「申し訳ありませんが、全部、ぜんぶ、ゼェ〜〜〜ブあります。」

島氏は1000点程か。私はそれを上回っているのは確かだが島氏独特のジョークにも丁重にお断り申し上げた。

9時には後片付けを済ませ、道路に上がる。◎◎氏が東洋でバス待ちをするということ、私たちが東洋までお付き合いさせていただく。さすが百戦錬磨の◎◎氏である、軽いお喋りの中にも盈蓄（うんちく）のある言葉が並び、今後の私の釣りに大変参考になった。

東洋のバス停でバス待ちをしていると、行進曲の軽快な音楽が流れてくる。えりも町立東洋小学校が小高い丘の上であり、万国旗が棚引くのが見え、号砲の音と共に歓声が聞こえて来る。沖ノ島に乗っていた6時、そして上がった9時に花火の音が聞こえ、昆布取りの合図にしては時期や時刻が合わないと思っていたが、運動会の予告や開始を告げる花火であったのだ。

漁師町の運動会はどうなのだろう。本日だけは漁を休んで、地域をあげての運動会が予想される。青年団や婦人会の種目や部落対抗のリレーで熱狂する様子は、都会では見られなくなってきた風景であり、その存続を願うがものであるがいかがであろう。地域あげてのイベントが少なくなり、隣近所の付き合いも薄ら寒いものになってきたのはさみしい限りである。

家庭や地域の空洞化が進み、人の心の表皮をめくり返すような不可解な嗜虐的な事件が続く。一面的な価値観で世界を動かそうとするテロ行為とその報復攻撃で罪のない人々が殺傷されていく。気分が滅入ることが多いが早く悪夢から覚醒したい。

リベンジ果たす

審査の結果は、

| | | | | |
|-----|------|--------|------------------------------------|-----|
| 優 勝 | 鹿島釣狂 | 1259 点 | (アブラコ 460 mm + カジカ 345 mm + 4540g) | 沖の島 |
| 準優勝 | 前野達志 | 1155 点 | くアブラコ 449 mm + カジカ 338 mm + 3680g) | 歌 露 |
| 3 位 | 島 強二 | 1098 点 | (アブラコ 381 mm + カジカ 357 mm + 3600g) | 沖の島 |
| 4 位 | 吉井 博 | 903 点 | (カジカ 365 mm + ハゴトコ 316 mm + 2320g) | 歌 露 |
| 5 位 | 嵐 光博 | 891 点 | (カジカ 360 mm + ハゴトコ 278 mm + 2530g) | 歌 露 |

であった。



これで屈辱の第1回大会のリベンジを晴らしたことになる。岩見沢に到着したときには、幼稚園の運動会も終わり、園庭はシーンと静まり返っていた。各家庭ではかわいい我が子や孫のかけっこやお遊戯を肴に談笑が続いているのだろう。私も本大会の戦いの余韻に浸りながら愛竿の汚れを落とし、みそ汁にしたカジカの頭を啜りながら次大会への思いを巡らすのである。

追記

岩見沢釣遵会では新会員を募集しております。磯釣りを愛する貴方、又はこれから磯釣りに挑戦しようとする貴方、まずは臨時会員として一緒に参加してみませんか。初心者大歓迎です。煩わしい指導はなく、釣り場や仕掛けなどについては懇切丁寧に仲間が教えてくれます。大会審査は2魚種身長+5尾重量制です。大会毎の臨時会員も表彰の対象となっております。豪華景品付です。大海原があなたを待っています。何より同じ趣味をもつ人間同士の切磋琢磨が人間を一回り大きくしてくれます。

お待ちしております。詳しいことはカナダ崖釣り具店にお聞きください。